

石川県加賀市のアクセント分布

松倉 昂平

キーワード: アクセント アクセントと語音の関係 加賀式 加賀方言

要旨

石川県加賀市内の 14 地点でアクセント調査を行った結果、市南部（旧山中町）には、従来報告のあった市北部（旧加賀市）の方言とは共時的な性質・系統的な位置付けが異なるアクセント体系が分布することが明らかになった。例えば、アクセント核の置かれ得る位置が語音構造（母音の広狭など）に制限されない、3 拍 2 類五段動詞（「下がる」など）が無核型に対応する、など旧加賀市方言には存在しない特徴が一部の方言には見られる。本稿では市内各地の多様なアクセント体系の概略を報告し、子音の有声性がアクセント核の位置を決める、助詞が付かない単語単独形で語末核型（-1 型）と次末核型（-2 型）の対立が中和する、といった通方的に見て珍しい現象が複数観察されることを示す。

1. 石川県加賀市の地理・調査結果の概要

石川県加賀市は石川県の南西端に位置する、人口約 66000 人（2020 年 4 月時点）の市である。2005 年 10 月に旧加賀市と旧江沼郡山中町が合併し現在の市域となった。市の全域がかつての加賀大聖寺藩領、旧江沼郡の領域に属し、市の中心部（旧江沼郡大聖寺町）は大聖寺藩の城下町として、日本海に面する沿岸部（橋立、塩屋）は北前船の寄港地として栄えた。市内には山代温泉、山中温泉、片山津温泉といった大規模な温泉街が集まり、観光業が盛んである他、山間部では山中漆器、九谷焼といった伝統工芸が今に伝えられ、多種多様な産業が行われている。地形的には、北部が平野と丘陵地（加賀平野と加越丘陵）、南部が山間地（両白山地）で、大聖寺川と動橋川の 2 つの河川が市内を南から北へ流れる。

加賀市方言のアクセントは、共時論的な枠組みとしてはアクセント核（下げ核）の有無・位置が対立する多型アクセントで、 n 拍語に $n+1$ 通りの型の区別があるいわゆる $P_n=n+1$ の体系である。先行研究で詳しい記述がなされている近隣方言の中では、金沢市方言（上野・新田 1982, 1983 など）のアクセントと類似する体系である。総じて加賀平野に広く分布する体系と共通する部分が多いとは言え、語音（分節音）がアクセントに影響を与える諸規則の有無、各アクセント型の所属語彙（類別語彙との対応関係）、動詞活用形のアクセントなど体系の細部には様々な地域差が認められる。(1) には加賀市方言のアクセントの多様性を示す一例として、2 拍名詞の類別語彙のアクセントを対照する。

(1) 加賀市方言の2拍名詞のアクセント¹

類	語例	2拍目	大聖寺	塩屋	菅谷	大土
1	庭	W	2 ニ[ワ]]	2 ニ[ワ]]	2 [ニ]ワ・ニ[ワ]ガ	2 ニ[ワ]・ニ[ワ]ガ
	虫	N'	1 [ム]シ	2 ム[シ]]	1 [ム]シ・[ム]シガ	2 ム[シ]・ム[シ]ガ
	鳥	N''	1 [ト]リ	1 [ト]リ	1 [ト]リ・[ト]リガ	2 ト[リ]・ト[リ]ガ
2・3	川	W	2 カ[ワ]]	2 カ[ワ]]	1 [カ]ワ・[カ]ワガ	1 [カ]ワ・[カ]ワガ
	雪	N'	1 [ユ]キ	2 ユ[キ]]	1 [ユ]キ・[ユ]キガ	1 [ユ]キ・[ユ]キガ
	紙	N''	1 [カ]ミ	1 [カ]ミ	1 [カ]ミ・[カ]ミガ	1 [カ]ミ・[カ]ミガ
4	船	W	0 フ[ネ	0 フ[ネ	0 フネ・フネガ	0 フ[ネ]・フ[ネガ
5	窓	W	0 マ[ド	0 マ[ド	0 マド・マドガ	2 マ[ド]・マ[ド]ガ

大聖寺は市の中心市街地、塩屋は市西端の漁村、菅谷と大土は市南部にある山村である。

(1) に挙げた4方言のうち、大聖寺、塩屋、菅谷の3方言は語の分節音の構造が核の置かれ得る位置を制限する方言である。例えば大聖寺方言では2拍目の母音の広狭に応じて1型²と2型が相補分布する関係にある(2拍目が狭母音ならば1型、非狭母音ならば2型)。菅谷方言には語末の狭母音は核を担わないという制約が見出せる。一方、大土方言にはそのような分節音とアクセントの相互作用が存在しない。

類別語彙³との対応に着目すると、「窓」など2拍5類名詞が大聖寺、塩屋、菅谷の3方言では主に無核型に、大土方言では主に2型に対応する点が異なっており、これに伴い類別体系(類の合流パターン)にも食い違いが見られる(大聖寺、塩屋、菅谷では4類と5類が合流、大土では1類と5類が合流)。

このように加賀市内には共時論的な性質・系統的な位置付けが異なる多種多様なアクセント体系が分布している。特に菅谷、大土など大聖寺川・動橋川の上流域のアクセントは特異な特徴を多く備えており大聖寺など平野部方言とは別種の体系と言って良い。

2. 先行研究

加賀市方言のアクセントを記述した主要な先行研究には平山(1938, 1951)、川本・野田(1978)、松倉(2017)がある。平山(1938, 1951)、川本・野田(1978)は大聖寺方言、松倉(2017)は塩屋方言を対象としたもので、この2地点以外のアクセントを詳しく取り上げた研究は管見の限りでは見当たらない。唯一言及がある部分としては、平山(1951: 19)に「江

¹ 0は無核型、1以上の数字は語頭から数えてn拍目に核がある型を表す。また[はピッチの上昇、]は下降、○]は拍内下降を表す。Wは非狭母音(e, o, a)を含む拍、N'は無声子音を含む狭母音の拍、N''は無声子音を含まない狭母音の拍を表す記号として用いる。

² 語頭から数えてn拍目に核がある型をn型と呼ぶ。

³ 類別語彙とは1つ1つの「類」の所属語彙である。日本語アクセント論における「類」(あるいは「語類」とも)とは、現代諸方言の比較と文献資料に基づき、日本語諸方言の共通祖語において同じアクセント型を有していたと推定される単語群を指す。金田一(1974)の分類(いわゆる金田一語類)では1拍名詞に3つ、2拍名詞に5つ、3拍名詞には6つの語群(「類」)が設定されている。

沼郡（大聖寺、三木、山谷⁴、山中等を中心とする）[...] は、音調は略其の特徴が通うから、これを江沼音調と総括する」との記述があり、旧江沼郡内（現在の加賀市内）はアクセントの地域差が少ないことが示唆されている。ただこれ以上具体的な記述はないため、市内の他の地域（特に南部の山間部）のアクセントは大聖寺方言と完全に同じものなのか、それとも何らかの相違はあるのか、正確なところは不明であった。本稿は最も山深い地域を含む加賀市内全域のアクセント分布を明らかにしこの不明点を解消するものと位置付けられる。

3. 調査地点・調査方法

本稿では加賀市内の 14 地点 16 名につき調査した結果を報告する。調査地点とその位置は図 1 と (2) の通り。

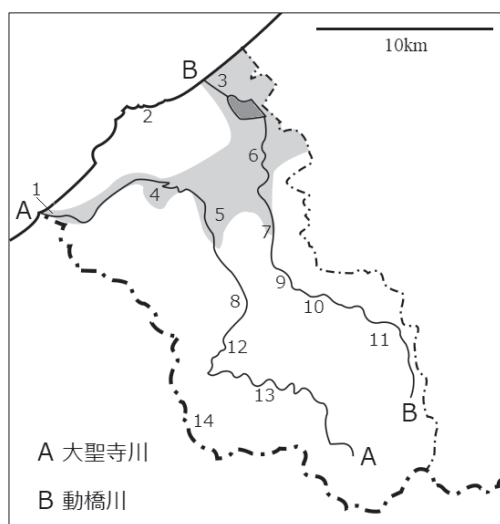


図 1. 加賀市内の調査地点（網掛けは平野部）

(2) 調査地点一覧（括弧内は話者の生年西暦下 2 桁と性別）

1. 塩屋町 (34f)、2. 橋立町 (27f, 42m)、3. 伊切町 (46m)、4. 大聖寺木呂場町 (35m)、
5. 山代温泉 (47m)、6. 動橋町 (43m)、7. 横北町 (44m)、8. 山中温泉栄町 (34f)、山
- 中温泉富士見町 (40f)、9. 山中温泉中津原町 (26m)、10. 山中温泉荒谷町 (30m)、11. 山
- 中温泉大土町 (53m)、12. 山中温泉菅谷町 (35f)、13. 山中温泉片谷町 (48m)、14. 山
- 中温泉大内町 (39f)

山中温泉栄町と山中温泉富士見町はどちらも旧江沼郡山中町の中心市街地にありまとめて 1 地点（山中）として扱う。

⁴ 誤植と見られる。おそらく正しくは旧江沼郡三谷村を指す「三谷」であろう。

行政区分上は北部の7地点(1~7)が2005年以前の旧加賀市、南部の7地点(8~14)が旧山中町にあり、地形的にも1~7は沿岸部・平野部、8~14は山間部と分けられる。2は丘陵地に囲まれた位置にあり平野部とは若干の隔絶がある。

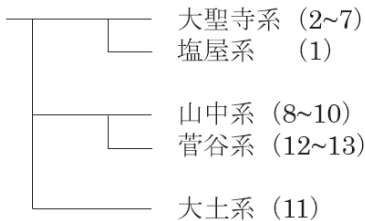
調査地点は話者が言語形成期を過ごした地点を表しており、必ずしも現住地とは一致しない。13, 14は九谷ダムの建設や過疎化に伴い1985年までに無人化した集落であり、現在は加賀市内の他地域にお住まいの方にお会いした。

1, 2, 8~14の調査は2014年9月から2019年12月にかけて話者と直接面談の上、3~7の調査は2021年3月~4月に電話上で、調査票を読み上げて頂く方式で行った。

4. アクセントの分類と分布

加賀市内のアクセントは、系統的な基準(類別語彙との対応関係)に基づく「大聖寺系」「塩屋系」「山中系」「菅谷系」「大土系」の5つの系統に大別される。

(3) 加賀市方言のアクセントの系統的な分類



大土系とその他の区分は1, 2拍名詞の類別体系(6.1節)、大聖寺・塩屋系と山中・菅谷系の区分は3, 4拍動詞の類別体系(6.3節)、大聖寺と塩屋、山中と菅谷の区分は3拍名詞の類別体系(6.2節)の相違に基づく。

共時的な性質の違いのみに基づくと(3)とはやや異なる分類が可能で、大聖寺・塩屋・山中系の諸方言が多くの共時的性質を共有しておりこれらの方言の体系を本稿では加賀市主流型がたと呼ぶ。菅谷系と大土系の諸方言は共時的な面でも独自の特徴を有しておりそれぞれの共時的な枠組みを指して菅谷型、大土型と呼ぶことにする。

(4) 加賀市方言のアクセントの共時論的な分類

加賀市主流型 (1~10)

菅谷型 (12~13)

大土型 (11)

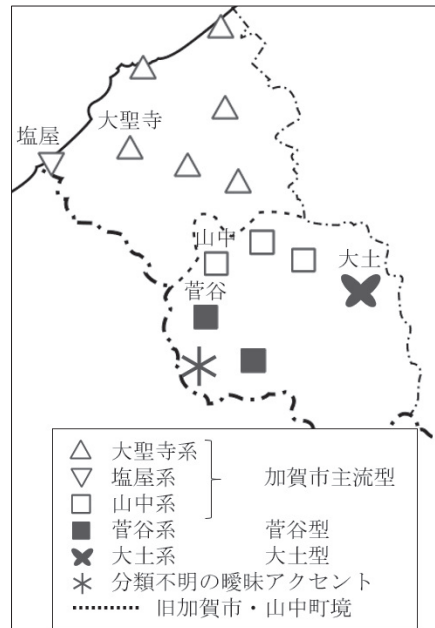


図 2. 加賀市内のアクセント分布

図 2 に示した通り、系統的な境界（大聖寺系と山中系の境界）は旧加賀市と旧山中町の市町境にほぼ一致するが、共時的な性質に関する境界（加賀市主流型と菅谷・大土型の境界）はそれよりも南へ下がることになる。

大内方言（地点 14）のアクセントは現時点では分類不明とせざるを得ない。型の区別があるにはある（無型アクセントではない）ものの、発音の揺れが大きくかつピッチの高低差も小さく、ほとんどの語について所属型が特定できていないためである。断片的な情報からは菅谷系・菅谷型に属するかと推測されるが確信は持てない。総じてアクセントの区別が明瞭な加賀市にあって異質な方言である。

5. 共時的な分類別の解説

5.1. 加賀市主流型

山奥の集落を除く加賀市の大部分には相互によく似通った共時的性質を有するアクセント体系が広く分布している。(5) に 1~4 拍名詞に区別されるアクセント型を一覧する。

(5) 加賀市主流型の名詞アクセント⁵（単独形と助詞「が」が付いた形）

型	1 拍	2 拍	3 拍	4 拍	
0	[メー メ[ガ]~[メーガ]	フ[ネ フ[ネガ]	ネ[ズミ ネ[ズミガ]	ニ[ワトリ ニ[ワトリガ]	(芽 船)
1	[カ]ー [カ]ガ~[カ]ーガ	[ト]リ [ト]リガ	[ナ]ミダ [ナ]ミダガ	[カ]ミナリ [カ]ミナリガ	(蚊 鳥)
2		ニ[ワ] ニ[ワ]ガ	サ[カ]ナ サ[カ]ナガ	ア[サ]ガオ ア[サ]ガオガ	(庭)
3			ク[ジラ] ク[ジラ]ガ	カ[ミ]ソリ カ[ミ]ソリガ	
4				マ[ナイタ] マ[ナイタ]ガ	

下げ核の有無・位置が区別され n 拍語に n+1 通りの型の区別がある。語末核型と無核型は単独形でも拍内下降の有無によってはっきりと区別される。各型の所属語数に大きな偏りはない（語例が僅少な型はない）。句音調は東京方言のそれとほぼ同じで、1 型を除くと句頭の 1 拍目は低く 2 拍目以降が高く実現する（ただし 2 拍目が長音や撥音だと 1 拍目から高い）。(5) は句頭位置での発音を示したものである。

そして加賀市主流型の諸方言は、核の置かれ得る位置が分節音の構造によって厳しく制限される現象を共有している。実際は分節音だけでなく語種や形態素構造も関わる複雑な

⁵ 0 (0 型) は無核型を表す。

現象なのだが⁶、ここでは和語かつ単純語のみを分析対象として、諸方言に観察される制約を列挙してみる。

(6) 分節音が核の位置に影響を与える諸制約

【1~10 に共通】

- a. 2 拍目が W (非狭母音) の語の 1 拍目には核が置かれない (*[ヤ]マ、*[イ]ノチ)
- b. 2, 3 拍目がともに N (狭母音) の語の 1 拍目には核が置かれない (*[モ]ミジ)
- c. W の直前にある N' (有声子音+狭母音) には核が置かれない (*ク[ル]マ)
- d. 特殊拍⁷には核が置かれない (*[コー]リ)

【2~10 に共通】

- e. 語末の N には核が置かれない (*ミ[ズ]、*ク[スリ]) ※3 拍語には例外多い

【1, 3~8 に共通】

- f. W の直前にある N' (無声子音+狭母音) には核が置かれない (*ム[ス]メ)

【1 にのみ存在】

- g. 2 拍目が N' の語の 1 拍目には核が置かれない (*[ユ]キ、*[マ]クラ)

方言によっては一部の制約を欠くことがあり、(6e) は 1.塩屋方言に存在しない、(6f) は 2.橋立、9.中津原、10.荒谷方言に存在しない制約である。これらの制約により、核の置かれる位置は語音構造から大部分が予測可能になり、例えば 2 拍和語名詞において 1 型と 2 型は相補分布をなす関係にある (表 1)。

表 1. 2 拍和語名詞における 1 型と 2 型の相補分布

方言 語音	2~10 (塩屋以外)		1.塩屋	
	1 型	2 型	1 型	2 型
○W	—	ヤ[マ]	—	ヤ[マ]
○N'	[ユ]キ	—	—	ユ[キ]
○N''	[ト]リ	—	[ト]リ	—

5.2. 菅谷型

大聖寺川の上流域、福井県境に程近い西谷地区 (旧江沼郡西谷村) の 2 集落 (12.菅谷、13.片谷) では、前節で示した加賀市主流型とは大きく異なるアクセント体系が確認された。(7) に菅谷方言の 1~4 拍名詞のアクセント型を一覧する。

⁶ 塩屋方言を対象とした概説は松倉 (2017) を参照されたい。また金沢市方言にも同様の現象があり上野・新田 (1983) に詳しい記述がある。

⁷ 長音・撥音・促音・同一音節内にある連母音 ai, oi, ui の後半の母音 i を指す。

(7) 菅谷方言の名詞アクセント

型	1拍	2拍	3拍	4拍	
0	メー メガ	フネ フネガ	ネズミ ネズミガ	ニワトリ ニワトリガ	(芽 船)
1	[カ]ー [カ]ガ	[ヤ]マ [ヤ]マガ	[モ]ミジ [モ]ミジガ	[カ]ミナリ [カ]ミナリガ	(蚊 山)
2		[ニ]ワ ニ[ワ]ガ	サ[カ]ナ サ[カ]ナガ	ア[サ]ガオ ア[サ]ガオガ	(庭)
3			サ[ク]ラ サ[ク]ラガ ⁸	カ[ミ]ソリ カ[ミ]ソリガ	(桜)
4				マ[ナイ]タ マ[ナイ]タガ	

加賀市主流型と同じく下げ核の有無・位置が区別される体系であるが、語末核型に特異な振舞いが見られる。2拍2型のニ[ワ]ガ、3拍3型のサ[ク]ラガ、4拍4型のマ[ナイ]タガを例にとると、それぞれ単独形では[ニ]ワ、サ[ク]ラ、マ[ナイ]タのように下降位置が1拍前にずれ、次末核型(-2型)との対立が中和するのである。語末や文節末にある拍に核を置くことを避ける Non-Finality の制約が様々な方言に見られるが、その現れと考えられる。3拍3型と認定される語例は現時点ではサクラ「桜」とシトリ「一人」の2語のみで、またどちらも2型も併用すると見られ、3型専用の語例が見つかっていない⁹。

無核型の実現形も加賀市主流型と若干異なり、低平調に近い発音が多い。あるいは3拍以上の文節では1拍目と2拍目の間に小さな上昇が生じる発音も聴かれる。2拍目が若干高く盛り上がったフ%ネ!ガ(LML)、ネ%ズ!ミガ(LMLL)のような実現形になることもあり、ニ[ワ]ガ(LHL)等の2型との聴き分けには少し注意を要する¹⁰。

そして分節音がどの程度アクセントに干渉するかも加賀市主流型とは異なり、前節で挙げた諸制約のうち菅谷方言に認められるのは(6d)「特殊拍には核が置かれない」と(6e)「語末のNには核が置かれない」のみである¹¹。また調査の範囲内では、「2拍目がW'(無声子音+非狭母音)の語の1拍目には核が置かれない」という制約が成り立つ。2拍名詞を例に取ればこの制約により「箱、音」など2拍目がW'である有核語は必ず2型、制約(6e)により「鳥、虫」など2拍目がNである語は必ず1型になる。よって2拍名詞において語音構造から核の位置を予測できないのは「枝、山」など2拍目がW'(無声子音を含まない非

⁸ サ[ク]ラガとも。2型との併用か。

⁹ 動詞活用形にはア[ル]ケ、ア[ル]ケマ「歩け」(3型)の例がある。マは命令・禁止形に付く強意の終助詞。

2型の命令形は助詞「マ」が付いても下降位置が動かない(ア[ガ]レ、ア[ガ]レマ「上がれ」)。

¹⁰ % で小さな上昇、! で小さな下降を表す。

¹¹ (6e) は名詞でのみ成り立つようである。動詞には[ネ]ル、ネ[ル]ワ「寝るわ」のような2拍2型の語例が豊富にある(cf. [オ]ル、[オ]ルワ「居るわ」)。また3拍3型のシ[トリ]ガ「一人が」も(6e)の例外である。

狭母音の拍) である語に限られる (表 2)。

表 2. 2 拍和語名詞における 1 型と 2 型の分布

方言 語音	12.菅谷	
	1 型	2 型
○W'	—	オ[ト]ガ
○W''	[ヤ]マガ	エ[ダ]ガ
○N	[ト]リガ	—

5.3. 大土型

最後に、動橋川流域の最上流に位置する大土方言¹²のアクセント体系を概説する。共時的な面でも系統面でも他の方言とは大きくかけ離れた、加賀市内では最も特異な体系である。

(8) 大土方言の名詞アクセント

型	1 拍 (2 拍)	2 拍	3 拍	4 拍	
0	[メー メ[ガ]	フ[ネ フ[ネガ]	ネ[ズミ ネ[ズミガ]	ニ[ワトリ ニ[ワトリガ]	(芽 船)
1	[ハ]ー [ハ]ガ~[ハ]ーガ	[オ]ト [オ]トガ	[ス]ガタ [ス]ガタガ	[カ]ミサマ [カ]ミサマガ	(葉 音)
2	[カー [カ]ガ~[カー]ガ	ニ[ワ ニ[ワ]ガ	ム[ス]メ ム[ス]メガ	カ[ミ]ナリ カ[ミ]ナリガ	(蚊 庭)
3			ク[スリ ク[スリ]ガ	カ[ミソ]リ カ[ミソ]リガ	
4				オ[トート オ[トート]ガ	

式の対立がない体系であるにもかかわらず 1 拍名詞に 3 通りの音韻的に異なる型の区別 (かつ 3 つの類の区別) を保持するという、全国に類例のない特徴を有する¹³。通常 1 拍名詞は長音を伴い 2 拍の長さに発音されるため、そこに[カー、[カー]ガ「蚊」と[ハ]ー、[ハ]ーガ「葉」のような核の位置対立が生じる (長音化しないと[カ]ガ=[ハ]ガで区別がなくな

¹² 大土町は動橋川沿いの山腹に拓かれた、往時は製炭業を生業としていた小さな山村集落である。1960 年時点で戸数 17、1990 年時点で戸数 6 (『山中町史 現代編』) と定住人口はわずかであるが、集落景観は維持されており近隣の 3 集落とともに重要伝統的建造物群保存地区にも指定されている。

¹³ 上野 (1988b: 68) によると石川県能登島の向田方言にも 1 拍名詞の長音形に大土方言と全く同じような 3 通りの対立がある: [カーガ「蚊が」、[ヒー]ガ「日が」、[ヒー]ガ「火が」。これを短く言うと「日が」と「火が」はともに[ヒ]ガで区別がなくなるといふ。この点も大土方言と同様である。しかし向田方言の体系は (金田一 (2005: 389 [1975]) では「完全な東京式」とされるが) 新田 (2005) によると依然として式の対立を保持する体系である。

る)。このように長音(特殊拍)が核を担い得る点は周辺方言には見られない性質である¹⁴。

また分節音がアクセントにほとんど影響を与えない点も周辺方言とは異なる。(6)の諸制約はいずれも大土方言には存在しない。

6. 系統・語類別の解説

6.1. 1, 2 拍名詞

6節では類別語彙(金田一 1974)との対応関係をまとめる。まずは(9)に1, 2拍名詞の各々の音調を系統別に比較する。

(9) 1, 2 拍名詞の類別語彙の比較¹⁵

類	語例	2拍目	塩屋	大聖寺・山中	菅谷	大土
1	蚊		1 [カ]ーガ	1 [カ]ーガ	1 [カ]ーガ	2 [カー]ガ
2	葉		1 [ハ]ーガ	1 [ハ]ーガ	1 [ハ]ーガ	1 [ハ]ーガ
3	芽		0 [メーガ	0 [メーガ	0 メガ	0 メ[ガ
1	箱	W'	2 ハ[コ]ガ	2 ハ[コ]ガ	2 ハ[コ]ガ	2 ハ[コ]ガ
	庭	W''	2 ニ[ワ]ガ	2 ニ[ワ]ガ	2 ニ[ワ]ガ	2 ニ[ワ]ガ
	虫	N'	2 ム[シ]ガ	1 [ム]シガ	1 [ム]シガ	2 ム[シ]ガ
	鳥	N''	1 [ト]リガ	1 [ト]リガ	1 [ト]リガ	2 ト[リ]ガ
2・3	音	W'	2 オ[ト]ガ	2 オ[ト]ガ	2 オ[ト]ガ	1 [オ]トガ
	川	W''	2 カ[ワ]ガ	2 カ[ワ]ガ	1 [カ]ワガ	1 [カ]ワガ
	雪	N'	2 ヌ[キ]ガ	1 [ユ]キガ	1 [ユ]キガ	1 [ユ]キガ
	紙	N''	1 [カ]ミガ	1 [カ]ミガ	1 [カ]ミガ	1 [カ]ミガ
4	船		0 フ[ネガ	0 フ[ネガ	0 フネガ	0 フ[ネガ
5a	窓		0 マ[ドガ	0 マ[ドガ	0 マドガ	2 マ[ド]ガ
5b	白		2 シ[ロ]ガ	2 シ[ロ]ガ	1 [シ]ロガ	1 [シ]ロガ

1, 2拍名詞の類別体系は塩屋・大聖寺・山中系の諸方言が相互に一致し、1拍1・2類=1型/3類=無核型、2拍1・2・3・5b類=語音構造に応じて1型か2型/4・5a類=無核型である¹⁶。大土方言がこれと食い違い、1拍名詞は3つの類の区別を残し1類=2型/2類=1型

¹⁴ 撥音や促音が核を担う例は目下発見できていない。

¹⁵ 2拍3類名詞は2類と同じく振舞うので記載を省略する。

¹⁶ 加賀市方言の2拍5類名詞には特定の音韻条件に基づかない類の分裂(1つの類に2つ以上の型が対応する現象)が見られる。本稿では大聖寺・塩屋・山中・菅谷系の諸方言で無核型になる語群を5a類、有核型になる語群を5b類と呼ぶことにする。ここには9.中津原方言(山中系)のデータを挙げる:

0型 秋、朝、汗、雨、兄、鮎、桶、黍、鯉、猿、縦、足袋、露、鶴、鍋、春、鮎、蛇、窓、婿(以上5a類)

1型 藍、虻、牡蠣、^{へり}蛭

2型 青、赤、井戸、蜘蛛、黒、声、琴、白、陰、鮭、前(以上5b類)

／3類＝無核型、2拍名詞は1・5a類＝2型／2・3・5b類＝1型／4類＝無核型となる¹⁷。菅谷系は塩屋・大聖寺・山中系と一致する部分が多いが2拍1類と2・3類の区別を完全には失っていない点、古色を残す（○W”の語音環境に限り1類＝2型／2・3類＝1型か2型）。

注目されるのは2拍2・3類名詞における語音構造とアクセントの関係で、(9)の右側から大土系、菅谷系、大聖寺・山中系、塩屋系の順に1型が2型へ転じる語音環境が階層的に増えていく。加賀市内では1型から2型への核の後退が分節音の構造に応じて段階的に（2拍目がW’>W”>N’の順に）進んだことが示唆される。この通時的変化過程は各系統の地理的分布にも表れており、概ね北西に向かうほど核の後退が生じる環境が拡大することがわかる（図3）。

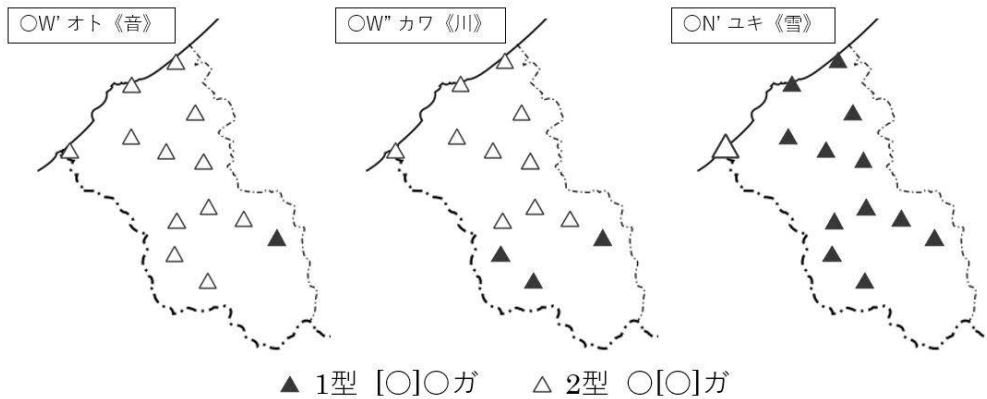


図3. 2拍2類名詞「音、川、雪」のアクセント分布

¹⁷ 11.大土方言でも2拍5類名詞は1つの型にまとまって対応せず主に1型と2型に分属する：

1型 藍、青、赤、蛇、井戸、黍、蜘蛛、黒、声、琴、白、足袋、蛭、婿

2型 秋、汗、兄、雨、桶、牡蠣、陰、鯉、鮭、前、窓

0型 朝、鮎、猿、縦、鍋、春、鮎、蛇

中津原方言（山中系）で有核型の語（5b類）に下線を引いた。例外もあるものの、中津原で有核型ならば大土では1型、中津原で無核型ならば大土では2型か無核型、という対応が見られる。

6.2.3 拍名詞

続いては (10) に 3 拍名詞の各類の音調を比較する。2 類と 3 類（小豆類と二十歳類）は元より所属語数が少ない類であり調査データも十分でないので本稿では取り上げない。

(10) 3 拍名詞の類別語彙の比較¹⁸

類	語例	2,3 拍目	塩屋	大聖寺・山中	菅谷	大土
1・4	魚	WW	2 サ[カ]ナ	2 サ[カ]ナ	2 サ[カ]ナ	2 サ[カ]ナ
	漆	NN	2 ウ[ル]シ	2 ウ[ル]シ	2 ウ[ル]シ	2 ウ[ル]シ
	桜	N'W	3 サ[クラ]	3 サ[クラ]	2~3 サ[ク]ラ	2 サ[ク]ラ
	車	N''W	1 [ク]ルマ~ 0 ク[ルマ	1 [ク]ルマ~ 0 ク[ルマ	0 クルマ	2 ク[ル]マ~ 0 ク[ルマ
5	姿	WW	2 ス[ガ]タ	2 ス[ガ]タ	1 [ス]ガタ	1 [ス]ガタ
	紅葉	NN	2 モ[ミ]ジ	2 モ[ミ]ジ	1 [モ]ミジ	2 モ[ミ]ジ
	柘榴	N'W	3 ザ[クロ]	3 ザ[クロ]	1 [ザ]クロ	2 ザ[ク]ロ
	涙	N''W	1 [ナ]ミダ	1 [ナ]ミダ	1 [ナ]ミダ	1 [ナ]ミダ
6	鼠		0 ネ[ズミ	0 ネ[ズミ	0 ネズミ	0 ネ[ズミ
	畑	WW	3 ハ[タケ]	3 ハ[タケ]	2 ハ[タ]ケ	3 ハ[タケ
7	薬	NN	3 ク[スリ]	2 ク[スリ	0 クスリ	3 ク[スリ

2 拍名詞と比べて方言差が大きくまた不規則な対応を見せる語も増えるが、おおよそ塩屋系は 1・4・5 類＝語音構造に応じて 1~3 型／6 類＝無核型／7 類＝3 型、大聖寺・山中系は 1・4・5 類＝語音構造に応じて 1~3 型¹⁹／6 類＝無核型／7 類＝語音構造に応じて 2~3 型、菅谷系は 1・4 類＝2 型／5 類＝1 型か 2 型²⁰／6 類＝無核型（7 類まとまりなし）、大土方言は 1・4 類＝2 型／5 類＝1 型か 2 型／6 類＝無核型／7 類＝3 型、といった対応が見られる。

塩屋系を大聖寺・山中系と区別する基準は 7 類の対応にある。「薬、辛子、椿」など語末が N の 7 類名詞が塩屋方言では 3 型に対応する一方（松倉 2017: e19）、大聖寺・山中系の諸方言では 2 型語になる（図 4）。要は 3 拍目が N という語音環境において塩屋方言は 1・4・5 類と 7 類の区別を維持している（ウ[ル]シ＝モ[ミ]ジ≠ク[スリ]）のに対し、大聖寺・山

¹⁸ 3 拍 4 類名詞は概ね 1 類と同じく振舞うので記載を省略する。「車」は各地で有核型と無核型を併用。

¹⁹ [ナ]ミダなど○N''Wであれば 1 型、サ[カ]ナ、ウ[ル]シのように○W○、○NNであれば 2 型。サ[クラ]など○N'Wの語は方言・単語による差が大きい。3 型になる語が多いものの方言によっては 1 型の語例（8. 山中方言の[マ]クラ「枕」、10. 荒谷方言の[サ]クラ「桜」など）も 2 型の語例（2. 橋立方言のウ[チ]ワ「団扇」、9. 中津原方言のム[ス]メ「娘」など）も散見される。

²⁰ 12. 菅谷方言の 3 拍 5 類名詞のデータを示す。5 類語全てが 1 型に対応するわけではなく 2 型語も同数程度含まれる。また「油、胡瓜」など無核語も若干含まれる（ちなみに「油、茄子」は加賀市内の全地点で無核型、「胡瓜、柱、枕」も無核型の分布が優勢）。

1 型 鮑、哀れ、命、親子、神楽、柘榴、姿、涙、箒、紅葉

2 型 朝日、五つ、いとこ、鱈、心、簾、情け、錦、火箸、わさび

0 型 油、胡瓜、櫛、茄子、柱、枕

中系はこの環境で1・4・5類と7類の区別を失っているのである。この点では塩屋方言がより古い形を保っている。

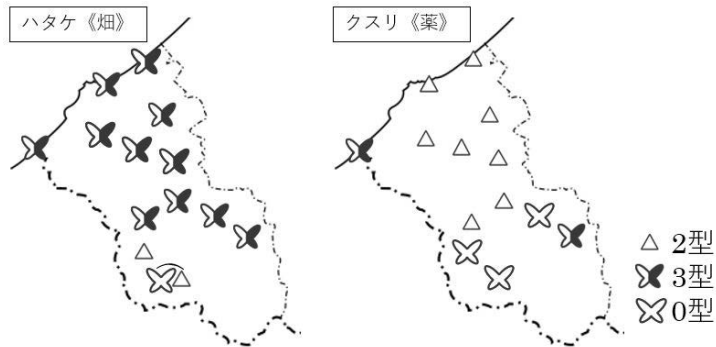


図4. 3拍7類名詞「畑、薬」のアクセント分布

6.3.3.4 拍動詞

最後に、市の北部と南部（旧加賀市と旧山中町）では動詞の類別体系に系統上重大な食い違いが見られることを指摘する。(11)には3拍五段動詞と4拍一段動詞の基本形のアクセントを比較する。

(11) 3拍五段動詞と4拍一段動詞の類別語彙の比較²¹

類	語例	塩屋	大聖寺	山中	菅谷
1	上がる	2 ア[ガ]ル	2 ア[ガ]ル	2 ア[ガ]ル	2 ア[ガ]ル
2	下がる	2 サ[ガ]ル	2 サ[ガ]ル	0 サ[ガ]ル	0 サガル
3	歩く	0 ア[ル]ク	0 ア[ル]ク	0 ア[ル]ク	0 アルク
1	並べる	3 ナ[ラ]ベル	0 ナ[ラ]ベル	2 ナ[ラ]ベル	2 ナ[ラ]ベル
2	集める	3 ア[ツ]メル	0 ア[ツ]メル	0 ア[ツ]メル	0 アツメル
3	隠れる	3 カ[ク]レル	0 カ[ク]レル	0 カ[ク]レル	0 カクレル

²¹ 議論を簡潔にするため(11)には挙げなかったが大土方言の3拍五段動詞の類別体系はおおよそ1・2類=2型(無核型も混在)/3類=無核型(2型も混在)とまとめられる。近隣方言との接触の影響なのか、類と型の対応にやや乱れがある。4拍一段動詞は山中・菅谷系と同じく1類=2型/2・3類=無核型。

山中系の1方言(9.中津原方言)のデータをここに挙げておく:

- 2型 【1類】上がる、当てる、洗う、歌う、送る(0も)、終わる、飾る、変わる、使う、続く、繋ぐ、並ぶ、握る、運ぶ、曲がる、渡る、笑う 【2類】奪う、選ぶ、思う、帰る、乾く、過ごす、叩く、悩む、走る、光る、守る、許す
- 0型 【1類】遊ぶ、送る(2も)、磨く 【2類】余る、痛む、動く、移る、落とす、泳ぐ、掛る、被る、下がる、絞る、倒す、頼む、作る、包む、通る、届く、治る、濁る、盗む、残る、伸ばす、払う、開く、戻る、休む 【3類】歩く、隠す、入る
- 1型 【1類】外れる 【2類】助ける
- 2型 【1類】与える、慌てる、生まれる、重ねる、固める、並べる、広げる、纏める 【2類】疲れる
- 0型 【1類】教える、聞こえる、比べる、伝える、始める、忘れる 【2類】集める、合わせる、覚える、数える、被せる、零れる、調べる、倒れる、訪ねる、束ねる、流れる、離れる、乱れる、求める、破れる、汚れる 【3類】抱える、隠れる、支える

3拍五段動詞の類別体系は塩屋・大聖寺系が1・2類=2型/3類=無核型、山中・菅谷系が概ね1類=2型/2・3類=無核型となり、2類語が2型（有核型）に対応するか無核型に対応するかが市の南北で食い違う（図5）。また4拍一段動詞については山中・菅谷系が1類と2・3類の区別を保持する一方で塩屋・大聖寺系では類の区別が失われ4拍一段動詞が無核型（塩屋では3型）に統合されつつあるという南北差が見られる。



図5. 3拍2類五段動詞「下がる」のアクセント分布²²

この類別体系の食い違いから、塩屋・大聖寺系と山中・菅谷系の共通祖体系は3拍五段動詞の3つの類を全て区別する体系であったことがわかる。（能登地方との境界付近を除くと）石川県加賀地方においてこの3つの類を区別する体系は、報告のある限り白山市白峰方言のような下降式と非下降式（平進式）の対立を有する体系の他にない。

(12) 白山市白峰方言の3拍五段動詞（中澤・松倉・新田 2018: 20）

	基本形	テ形	
1類	ア[ガ!ル	ア[ガ!ッテ	（下降式無核型）
2類	[サ]ガル	サ[ガッテ	（基本形は下降式1型、テ形は非下降式無核型）
3類	ア[ルク	ア[レイテ	（非下降式無核型）

おそらく加賀市方言の祖体系も白峰方言と同じく下降式と非下降式（平進式）の対立を有し（12）のような形で3つの類を区別する体系であったと推定される²³。山中・菅谷系の

²² 山中・菅谷系では過去形「下がった」は4型になる地点が多い。その実現形は加賀市主流型の8.山中、9.中津原、10.荒谷方言ではサ[ガッタ]、菅谷型の12.菅谷方言では次の通り：

4型 サ[ガ]ッタ サ[ガ]ッタトキ サ[ガ]ッタワ 「下がった（時/わ）」

cf. 2型 ア[ガ]ッタ ア[ガ]ッタトキ ア[ガ]ッタワ 「上がった（時/わ）」

「下がった」が文節末にある時は核が次末音節に前進し2型との対立が中和する。「ワ」など助詞を付けた時に「下がった」と「上がった」（4型と2型）の対立が現れる。

²³ もちろん式の対立がない体系でも、核の有無・位置の対立だけで——例えば1類=ア[ガ]ル/2類=[サ]ガル/3類=ア[ルク]のような形で——3つの類を区別することは可能であるが、これを祖形とすると山中・菅谷系で2類が（1類と合流することなく）無核型に転じる動機・過程の説明が難しくなると思われる。

諸方言で 2 類が無核型に対応するのは、過去に式の対立があった時点で 3 拍五段動詞の基本形を無核型に統一する類推変化（*[サ]ガル>サ[ガル]）が生じたためであろう。なぜ 1 類（*ア[ガ!ル]）と同じ下降式無核型ではなく 3 類（*ア[ルク]）と同じ非下降式無核型の方に同化したのか、という疑問についてもやはり白峰方言に解答の糸口がある。(12) に示したように白峰方言では 2 類語のテ形が 3 類と同じ非下降式無核型（サ[ガッテ]）で現れる。*[サ]ガル>サ[ガル]はこのテ形の音調に基本形の音調を同化させる類推変化である²⁴。

7. まとめ

以上、本稿では石川県の南西端にある加賀市内のアクセント分布及び各地の体系の概略を示した。従来アクセントの地域差があまりないと思われてきた一帯にあたるが、市南部の山間部（旧山中町）には北部の旧加賀市方言とは共時的な性質・類別体系（類の合流パターン）が異なる当地固有のアクセント体系が分布することが明らかになった。

市内の主要な方言の特徴を表 3 にまとめる。

表 3. 加賀市諸方言の共時的・系統的特徴の一覧

特徴	地点	1.塩屋	4.大聖寺	8.山中	12.菅谷	11.大土
共時的な分類		加賀市主流型			菅谷型	大土型
語音構造の影響		○			△	×
核を担う単位		音節				モーラ
語末核型の表現形		ニ[ワ]] ニ[ワ]ガ			[ニ]ワ ニ[ワ]ガ	ニ[ワ ニ[ワ]ガ
系統的な分類		塩屋系	大聖寺系	山中系	菅谷系	大土系
類別体系	1 拍名詞	12/3				1/2/3
	2 拍名詞	1235b/45a			1/235b/45a	15a/235b/4
	3 拍五段動詞	12/3		1/23		12/3
	4 拍一段動詞	3 型に統一	0 型に統一	1/23		

○：著しい影響あり △：影響あるが比較的小さい ×：ほとんど影響なし

概ね北部の旧加賀市方言はより多くの改新を経た体系、南部の旧山中町方言はより古色を残す保守的な体系を有すると言える。特に、分節音の構造が核の置かれ得る位置を制限する現象が存在しない大土方言は、この現象が加賀市方言に発生する以前の姿をとどめる貴重な方言である。

²⁴ 近代以降、京都市方言を含む多くの中央式アクセント諸方言でも 3 拍動詞の基本形を無核型に統一する [オ]キル (H1) > オキ[ル (L0)、[ウ]ゴク (H1) > [ウゴク (H0) といった類推変化が生じていることが知られる（金田一 1955, 新田 2004 など）。[オ]キル>オキ[ルはオキ[テ... (L0) からの類推、[ウ]ゴク>[ウゴクは[ウゴイテ... (H0) からの類推と考えられている（ここでのオキ[テ..., [ウゴイテ...は補助動詞が後続する時の形）。

また通方的に見て珍しい特徴も数多く見られる。まず1つ目に、大土方言は1拍名詞に3つの類・3通りの型の区別(1類=[蚊一]ガ/2類=[葉]ーガ/3類=芽[ガ])を保持するがこれは式の対立のない体系としては異例と言える特徴である。2つ目に、菅谷方言は単語に助詞が付かない場合語末拍に核がある型と次末音節に核がある型の対立が中和する現象を有する。大土方言やあるいは東京方言などのように単語単独形で語末核型と無核型の対立が中和する方言はありふれているが菅谷方言のような中和パターンはほとんど類例がない²⁵。3つ目は、母音の広狭だけでなく子音の有声性もまたアクセントに強い影響を与える点である。母音の広狭が関与する方言は全国各地に遍在するがこれに子音の有声性が加わる方言は加賀市を含む石川県各地の方言や愛媛県西予市田之浜方言(清水 2006)などに限られ数が少ない。特に菅谷方言の「2拍目がW'(無声子音+非狭母音)の語の1拍目には核が置かれぬ」という制約(5.2節)は現在のところW'かW''かによってアクセント上の振舞いが変わる唯一の現象例ではないかと思われる。N'とN''の振舞いが異なる方言・現象は比較的多いがW'とW''を区別する方言は他に報告例がない。

類別体系にもいくらか地域差が見られ、系統的な多様性も存外大きいことが明らかになった。少なくとも塩屋・大聖寺系、山中・菅谷系、大土系の3系統の分岐は式の対立——おそらく白山市白峰方言のような下降式と非下降式(平進式)の対立——を有していた時点にまで遡る。また一方ではどの系統も2拍5類名詞が2つ以上の型に分属する現象(5a類と5b類の区別)を共有しており、これを共通改新として加賀市方言の諸体系を1つの系統にまとめられる可能性がある。

謝辞

長時間の調査にご協力頂いた話者の皆様並びに協力者の方々をご紹介頂いた塩屋地区まちづくり推進協議会、東谷地区まちづくり推進協議会、西谷地区まちづくり推進協議会、山中老人福祉センター、橋立地区まちづくり推進協議会、大聖寺地区まちづくり推進協議会、動橋地区まちづくり推進協議会、山代温泉まちづくり推進協議会、東谷口地区まちづくり推進協議会、湖北地区まちづくり推進協議会(訪問順)の皆様にご礼申し上げます。

本研究は科研費補助金(特別研究員奨励費)「北陸諸方言の音韻・文法体系の記述的研究」(19J00755)、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果の一部です。

²⁵ 愛媛県魚島方言のアクセント体系には菅谷方言と類似の中和現象が報告されている。上野(1988a)より2拍名詞の音調型を引用する:

0型 マ[ツ~マツ、マ[ツガ~マツガ

1型 [イヌ]~[イ!ヌ~[イ]ヌ、[イヌ]ガ~[イヌ]ガ~イ[ヌ]ガ

2型 [ミズ]~[ミ!ズ~[ミ]ズ、ミ[ズガ]~[ミズガ]

単語単独形では1型と2型の対立が中和する(無核型との対立はあり)。3拍語でも同様に単独形では2型と3型の対立が中和するようである。

参考文献

- 上野善道・新田哲夫 (1982) 「金沢方言の名詞のアクセント：アクセント体系と所属語彙」
『国語研究』45, 1-31.
- 上野善道・新田哲夫 (1983) 「金沢方言におけるアクセントと語音の関係」『日本海文化』
10, 1-43.
- 上野善道 (1988a) 「愛媛県魚島方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』
17, 59-80.
- 上野善道 (1988b) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』35-73.
- 川本栄一郎・野田浩 (1978) 「第三章 加賀市の方言」加賀市史編纂委員会編『加賀市史 通
史上巻』121-176.
- 金田一春彦 (1955) 「近畿中央部のアクセント覚え書き」近畿方言学会編『東條操先生古稀
祝賀論文集』323-345.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京：塙書房.
- 金田一春彦 (1975) 「東西両アクセントの違いができるまで」『日本の方言：アクセントの
変遷とその実相』東京：教育出版。(金田一 (2005: 374-414) に再録)
- 金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集 第七巻』東京：玉川大学出版部.
- 清水誠治 (2006) 「愛媛県西予市田之浜方言のアクセントと語音の関係について」『音声研
究』10, 30-38.
- 中澤光平・松倉昂平・新田哲夫 (2018) 「白峰方言アクセント調査報告」原田走一郎・新田
哲夫編『日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 石川県白
峰方言調査報告書』13-35.
- 新田哲夫 (2004) 「京阪式アクセントにおける動詞の類推変化について」『国語学』55 (1),
16-30.
- 新田哲夫 (2005) 「アクセント論——能登島の「式」の変化を考える」『國文學 解釈と教
材の研究』50 (5), 34-43.
- 平山輝男 (1938) 「北陸道アクセントの概観 (中)」『音声学協会会報』53, 5-9.
- 平山輝男 (1951) 「北陸道方言の音調」寺川喜四男ほか編『国語アクセント論叢』東京：法
政大学出版局.
- 松倉昂平 (2017) 「石川県加賀市塩屋方言におけるアクセントと語音の関係：アクセント資
料付」『東京大学言語学論集』38, e1-e31.

Distribution of Accent Systems in Kaga City

MATSUKURA Kohei

Keywords: accent, tone-segment interaction, Kaga type, Kaga dialect

Abstract

The author has conducted fieldwork in 14 villages in Kaga City and found out that the dialects in the southern part of the city (the former Yamanaka Town) have accent systems that differ from those previously reported in the northern part of the city (the former Kaga City) in both synchronic and diachronic aspects. For instance, some southern dialects have characteristics that northern dialects do not have, such that the segmental features (e.g., vowel height) do not play a role in determining the location of the accent, or that three-mora consonant-stem verbs of tone class 2 (e.g., *sanaru* ‘go down’) correspond to the unaccented pattern. In this paper, the author reports the outline of each accent system found in Kaga City, and shows that several cross-dialectally rare phenomena can be observed in some dialects, such as the interaction between accent and voicedness of consonants (that is to say, voiceless consonants attract accent), and the neutralization of the contrast between the final and the penultimate accent when no particle is attached.

(まつくら・こうへい 金沢大学／日本学術振興会特別研究員PD)